

つながり深まる確かな学び

「音楽づくり」 ガイド



I 系統的、連続的、発展的に学ぶ「音楽づくり」

「音楽づくり」は、音楽をつくる学習であることは明白ですが、「さあ、音楽づくりをしましょう！」と言って、すぐできるものではありません。低学年から様々な学習を経て「音楽づくり」に必要な知識や技能を身に付けていく過程が重要であり、子供たちがどのような発想を得て、どのような思いや意図をもってつくろうとしているのかを積み重ねていくことが必要です。そこでは、「歌唱」や「器楽」に共通するものがあったり、「鑑賞」の学習にリンクしたりすることもあるでしょう。つまり、「音楽づくり」を系統的、連続的、発展的に学ぶことで、自分の考えをもちながら音楽をつくる知識や技能を高めるとともに、他の領域や分野に必要な諸能力も高まっていくのです。

本ガイドでは、「系統的、連続的、発展的に学ぶ『音楽づくり』」を次のように示すことにしました。

○ 第1学年～第4学年の教科書に掲載されている「そだてよう」を常時的な活動として位置付け、「音楽づくり」を行うために必要な諸能力を身に付け、見通しをもって学習に取り組める活動を提示しました。また、発展的な活動も示し、他学年の題材や音楽づくりの教材に生かす具体例を記載しました。

<例> 第1学年「手拍子でリレー」では、手拍子による「規則的な拍のリレー」から「あいまいな拍のリレー」「いろいろな拍子のリレー」「リズムのリレー」へと発展し、本教材を含む題材の次の題材で連続的に活用したり、第3学年の題材に応用したりすることができます。この活動は第2学年の「2拍子でリズムあそび」「3拍子でリズムあそび」にもつながります。

○ 令和6年度教科書に比較的新しく掲載された「音楽づくり」の教材を取り上げて、その展開を詳細に記し **評価**  として、評価場面や方法、子供の状況などを示しました。また、教科書の二次元コードコンテンツ「ムーブの部屋」やカトカトーンなど、ICTの活用が有効な活動では、その内容や活用の仕方を具体的に提示しました。さらに、他題材や他学年との系統性、連続性、発展性についても、各教材の学習展開の最後に記述しました。

<例> 第6学年「ボイスアンサンブル」では、カトカトーンを活用した展開例を示し、指導者の発問例などを吹き出しに記し、手順に沿った評価を「評価ガイド」にまとめました。さらに、これまでの学習からの系統性や中学校への連続性についても述べました。

1 常時的な活動として位置付ける

昨今の授業研究では、子供が見通しをもって学習に取り組んでいくために、「常時的な活動」を重視する傾向があるように思います。それは、「音楽づくり」では、学習内容と関連付けたり、系統的、連続的に音楽の諸能力を身に付けたりする「常時的な活動」を授業の中に位置付けることで、中心となる学習に主体的に見通しをもって取り組めるようになっていくからにほかなりません。常時的な活動といっても、様々な内容が考えられます。歌唱のための発声練習やリコーダーの運指練習もそれに当たります。ここでは、前項でも触れたように、「そだてよう」を「音楽づくり」につながる常時的な活動として位置付けました。本ガイドでは、第1学年～第4学年の教科書に示された「そだてよう」を「音楽あそび」と捉えています。しかし、「音楽づくり」につながるだけではありません。例えば、「おとでおはなし」の活動においては、歌唱の「曲の特徴にふさわしい表現を工夫」する思考・判断・表現の礎になったり、「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う技能」を身に付けることに関わったりしてきます。したがって、それぞれの活動が目指すねらいを明確にしながら、子供たちの表現がそのねらいに即して高まっていくように調整しながら活動を進めることが大切です。

常時的な活動というと、授業のはじめに行うものと思われがちです。また、常時的な活動を行うと子供たちが集中するので、本時の学習内容とは異なる活動にかなりの時間を割いてしまったり、常時的な活動が楽しいあまり次から次へ進み、今日の授業で学ぶことは何だったのか分からなくなる「音楽あそびのオンパレード」のような授業になってしまったりすることもあります。常時的な活動は、系統的、連続的に子供の音楽的な諸能力を高めるものではありませんが、本活動のねらいが見えなくなったのでは、子供自身が今日学んだことを実感できません。そのため、次のことに留意しながら活動を取り入れるようにすると、音楽の授業が楽しく学びのある活動になっていくのではないかと考えています。

- 1 常時的に行う「音楽あそび」のバリエーションを増やし、子供の考えを取り入れるようにする
- 2 主教材の展開につながる「音楽あそび」を取り入れる
- 3 常時的な活動として5分前後の内容を工夫する
- 4 常時的な活動で行ったことを想起しながら本活動を展開できるようにする
- 5 効果的な場面で活用する



『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター）では、即興的に表現する活動の位置付けについて、学習評価と関連付けて詳細に述べられています（P.76、77参照）。そこでは、「指導事項ア、イ、ウのそれぞれにおいて、（ア）即興的に表現する活動と（イ）音を音楽に構成する活動の内容のまとまりを意識して指導を計画することが大切である」と示されています。一方で「実際には即興的に表現する学習の中に、音楽の仕組みを用いて音を音楽に構成する活動が含まれていたり、又は音を音楽に構成する学習の中に、即興的に表現しながら音楽づくりの発想を得る活動が含まれていたりすることが考えられる」とあり、取扱いについて習得を目指す資質・能力を考慮したうえで評価規準の設定を行うことの重要性が示唆されています。

本ガイドのⅡ『音楽づくり』につながる常時的な活動に挙げた「音楽あそび」は、「音遊びや即興的に表現する」ことに関わる内容です。したがって、ここで挙げた内容を学習指導要領のA表現(3)音楽づくりのア、イ及びウの各指導事項（ア）の学習として捉え、「音遊びや即興的な表現」として学習の目標や評価規準を設定して授業を展開することもできます。その際、留意したい点は「設定した条件」の内容です。本ガイドでも「音楽の仕組み」が条件に加わっているものがあります。ここでは、あくまでも条件として捉えて、音楽づくりの発想を得る学習として進めていくことが大切です。

本ガイドのⅢ『音楽づくり』の学習展開では、教科書に比較的新しく掲載された音楽づくりの教材を取り上げました。「音遊びや即興的に表現する」学習、「音を音楽に構成する」学習、その両方の資質・能力の習得を目指した学習を示し、その展開とともに評価規準について評価の場面や方法を **ポイント**、**評価ガイド** に具体的に示しました。

実際の紙面より

ポイント

- ・ 子供たちの活動の様子を巡視しながら、指名したり子供に推薦させたりして、学
- ・ 友達との活動が難しい子供には、指導
ねっこし合ったりします。

評価ガイド

本学習は、学習指導要領のA表現(3)音楽づくりの(イ)の指導項目に当たる内容です。この学習を無理なく展開するには、**ステップ1**で示した音遊びを行っておくことが重要です。その活動を行う中で、知識に当たるイ(ア)声や身の回りの様々な音の特徴、(イ)音やフレーズのつなげ方の特徴について、いろいろな音の響きやその組合せが生み出す面白さに気付きながら実感します。それが礎となって**ステップ2**では、絵から思い浮かべた打楽器の音を見付けたりつなげたりしながら、打楽器の音色の特徴を生かして反復や呼びかけとこたえを用いて、試行錯誤し音楽をつくっていきます。そして**ステップ3**では、**ステップ1**と**ステップ2**で身に付けた知識を生かし、反復や呼びかけとこたえなどの音楽の仕組みを用いて音楽をつくります。

Aと評価される子供は、例えば、絵から思い浮かべた音を打楽器の音色の特徴や面白さに気付いて自分の音として演奏したり、友達をつくった音をよく聴いて模倣したり、互いの音をつなげたりとどのような感じになるのかを的確につかんだりしている状況だといえます。

*音楽づくりのア、イ及びウの各指導事項の(イ)



前記の『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料では、「このような（両方の内容が学習に含まれている）場合、取り扱う事項として（ア）と（イ）の両方について設定することも考えられるが、育成を目指す資質・能力として、どちらの内容のまとまりにねらいを置くかを考え、（いずれかに絞って）指導と評価を計画することが必要になることもある」とあります。本ガイドのⅡで挙げた活動を「音を音楽に構成する」学習で活用する際は、評価の対象とせず、「音を音楽に構成する」学習につながる活動として位置付けると、効果的な学習の展開が期待できます。

「即興的に表現する」ことは、「音を音楽に構成する」ことを実現するためには必須の学習です。本ガイドのⅡの活動を様々な場面で活用していただきたいと思います。

3 題材における「音楽づくり」の位置付け

繰り返しになりますが、本ガイドでは教科書に比較的新しく掲載された「音楽づくり」の内容を取り上げ、詳細な展開や評価について述べています。教科書では、それらが「題材」の中で鑑賞や歌唱、器楽の学習内容と関わって位置付けられています。それは、題材で主に取り扱う音楽を形づくっている要素を基にして教材間の関連をもたせ、その題材での学びが深まることをねらっているからです。学習指導要領に示された領域や分野の内容のまとまりを意識しつつ、領域や分野をまたがって学ぶことで、「[共通事項] ア音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること」がより深まり、「音楽的な見方・考え方」の働かせ方が高まると考えられます。

例えば「ボイスアンサンブル」は、第6学年の題材2「いろいろな音のひびきを味わおう」の中に位置付けられています。「木星」では、オーケストラの響きや旋律の移り変わり、曲の反復や変化について理解しながら、演奏のよさや曲全体を味わって聴き、「ラバーズ コンチェルト」では、各パートの役割や旋律の特徴を意識して楽器を選択し、音の重なり合いを確かめながら器楽合奏を行います。そして、「ラバーズ コンチェルト」のリズム伴奏を音楽づくりのモデルとし、声を音の素材とした「ボイスアンサンブル」をつくる学習で、声の音色とその重なりから生まれる響きを楽しみながら、音楽の縦と横との関係を活用してまとまりを意識した音楽を構成していきます。この題材は、オーケストラの楽器の音色、器楽合奏における楽器の音色、個々のもつ声の音色という「いろいろな音のひびき」と「それらが重なることで生まれるひびきの豊かさ」を味わう学習で構成されています。このとき「音楽づくり」は、題材のまとめとしての学習にもなります。「いろいろな音のひびき」と「それらが重なることで生まれるひびき」のよさや面白さを感じ取り、自らの声を音の素材としてリズムの組合せを考え、音楽の縦と横との関係を用いて音を音楽に構成していく子供の姿を目指しています。

題材の中で学習内容をつなげたり、教材のもつ特徴を活用したりすることで、どのような音楽をつくっていけばよいか、身に付けたいことは何かといった見通しをもつことができます。また、それぞれの「音楽づくり」の教材は、他題材の学習や他学年での「音楽づくり」の学習にも関連していますので、それらについては、「**他題材や他学年との関連**」に記述しています。参考にしながら、子供の学びがつながり深まるように指導計画を立てていただきたいと思います。

実際の紙面より

他題材や他学年との関連

音楽の縦と横との関係は、2年生「3. ドレミで あそぼう」での輪唱や3年生「2. 歌って音の高さをかんとろう」のパートナーソングなど、歌唱を中心に低学年から扱われています。声を使ったリズムの重なりは、4年生「3. いろいろなリズムを感じ取ろう」でリズム伴奏を楽器で演奏する前に、楽器の音色を再現しながらリズム唱を行う学習活動で経験することもできます。ほかにも、2年生「おまつりの音楽」、4年生「言葉でリズムアンサンブル」、5年生「打楽器でリズムアンサンブル」で声や言葉を使った音楽づくりの学びを生かしていきます。

本学習で、パートの役割や声の響きの違いを生かしたリズムのつなげ方や重ね方、終わり方を学ぶことは、ほかの領域や分野の学習においても、生きて働く音楽的な見方・考え方となったり、中学校での「音素材や構成を工夫して音楽をつくる学習」でも活用されたりしていくと考えています。



4 指導者の価値付けと「音楽づくり」の評価

「音楽づくり」に限ったことではありませんが、子供の表現や作品、発言内容などについて、即座にそのよさを見いだしたり価値付けしたりするのは指導者の大きな役目です。特に「音楽づくり」では、指導者の価値付けによって、作品の方向性が決まったり、子供が自信をもって音楽づくりを進められたりします。しかし、「価値付けの言葉が出てこない」「どのように伝えたらよいのか迷ってしまう」など、指導者の価値付けについての悩みがよく話題になります。指導者の価値付けの言葉は、子供たちの作品や表現をより豊かなものにし、子供との信頼関係を築くためにも重要です。私たち指導者は子供の様々な作品や表現、発言内容などについて、適切で子供の心に残る価値付けをしていく力を培っておく必要があります。それには、子供の活動状況をしっかりと把握し、子供と一緒に音楽をつくっていく指導者の姿勢も大切です。

そこで、本ガイドでは、**ポイント**や吹き出しで、そのヒントを示すようにしました。

「『静かにねむれ』の和音で旋律づくり」での例



前半と後半が両方とも上がっていく形の旋律なので、最後に向かって徐々に盛り上がっていく感じがします。



二人で最後まで力を抜かずに支え合っているような旋律になりましたね。

また、音楽づくりのルールを意識し、指導者自身が何を核に音楽をつくらうとしているのを見失わないように、子供の活動状況や作品内容を見極めていくことが必要です。音楽づくりで旋律をつくっているはずなのに、「リコーダーがよく吹けていた」という子供の発言から、ほかの子供たちの感想も器楽の技能に傾いていくようなことはないでしょうか。その際、「旋律はどのようにつくられていたかな？」と指導者が軌道修正することによって、子供は今日の学習における発言内容を考えられるようになります。子供の気付きや感じ方は多様で、ねらいから外れてしまうこともあります。そうしたときこそ、子供の発言内容や作品に対する指導者の価値付けの言葉によって、子供たちも作品についてどのようなことを伝えればよいのか気付いていきます。指導者自身が、どのような言葉を投げかけているか、これでよかったかなどを振り返りながら、作品のよさを聴き取ったり伝えたりする感性を高めていきたいものです。

